

## 釧路市における産業の発達と地域的条件

### 紙・パルプ工業を中心として

寺 木 江 理 子

釧路市は2段の海岸段丘と広い海岸平野「釧路平原（湿原）」からなり釧路川、阿寒川が太平洋に流れ込んでいる。市面積の7割は日本最大の泥炭地の一部で主として低位泥炭から成る。気候は一般に冷涼で、特に夏の海霧は気温の上昇を妨げ農作物等に制約を与えている。

人口は戦後4倍近く増え19万人で道内第4の都市で、市街地は釧路川左岸の段丘から始まり、川を両断し砂丘上に発達した。先住民族はアイヌとされ、17世紀前半に交易場所となって水産資源が交易商人の独占（藩、幕府から請負り形をとった）のもと取引され、アイヌはこの労働者となることを余儀なくされ虐待された。明治に入ってから石炭、奥地森林資源が財閥や商社の手で釧路港（1890特別輸出港指定）や鉄道で運び出された。市内では木材関連工業を主体に水産・食料品工業が始められ、中でも地元資本によらない紙・パルプ工業は一工場で大きい比重を占めた。戦後は北洋の漁業基地として、傾斜生産方式下の石炭、紙・パルプを基軸に急速な発展を遂げた。第3次産業（65%）が多く、農業人口（0.8%）は少なく地方中心都市としての性格も持っている。

農業は酪農主畜経営を主とし、一部農家への家畜集中が見られる。石炭は一般・電力用炭が海底採炭されているが、石油台頭の前に「合理化」が進められており、産業としての成長は壁にぶつかっている。釧路港は近年魚の水揚げ量日本一でスケソウ、サケなどの北洋の基地だが $\frac{2}{3}$ を外来船に依存している。地元では一部大型船は遠洋、沖合に出るが、多くの零細漁家は沿岸のエビ、シシャモ、サケに頼り、資源の減少、小型化が進行している。水揚げの $\frac{3}{4}$ は市で加工されるが低次加工にとどまっている。市内婦人のパートタイムが多いが出稼者もいる。水面貯木場を伴う木工団地の合・単板、化学肥料、船舶、乳製品等の工業では充足していた資源にも不足傾向が出てきている。

紙・パルプ工業は市第一の近代産業で付加価値は他に比べ高い。1899年、道内初のパルプ工場が釧路・阿寒川合流点に造られ上流の国有林からエゾマツ・トドマツを流送して原料に用いた。以後工場は日本のパルプ界を握る富士・王子製紙のものとなり、焼失後は新釧路川畔に建設され現十条製紙となって新聞巻取紙を専抄している。1959年には同じく旧王子の本州製紙が大楽毛阿寒川畔に進出し、段ボール原紙を製造している。針葉樹から広葉樹へ、丸太からチップへ、輸入材へと原料基盤に変化が見られるが、段ボール原紙生産工場では全国傾向を先取りするのに比べ、新聞専抄工場では緩慢である。本州に比べて用材入手が有利だが、森林資源に加えて国有林の

優遇措置と業者間提携、資本に物を言わせてのチップ工場系列化が支えになっている。他と競合しない用水権、港の存在も有利と言える。しかし、紙・パルプ工業が地域から受ける好条件に比して、地域にはそれほど働く場所が増えるわけではなく、最大の公害発生源ですらある。見合うメリットがあるとは言えない。食い荒らされているとも言える。釧路においては産業によって、地域の条件の生かし方、克服の仕方、地域との結びつきが異なっている。特に近代工業としての紙・パルプ工業と他産業の落差が大きい。これには産業の発達段階が大きな要因であると考えられる。

## 秩父市の産業構造とその変化

西 谷 陽 子

本論文は、埼玉県秩父市が、織物業という在来工業を持つ都市であることに注目し、在来工業織物業が、現在どのような状態にあるかを調べると共に、首都圏にあって、在来工業をもつ都市の実態を探ることを目的として、その際、特に最近における変化に重点を置いた。

秩父市は、東京から約70kmの埼玉県西部山中の盆地を中心に位置する人口約6万人の都市である。この市の産業については以下のようなものである。

第2次産業就業者数は、全就業者の45%を占めて多いが（全国は34%、昭和45年）36%は製造業によるものであり、製造業都市といえることができる。

第1次産業就業者は、13.4%を占め、全国より6%少く、減少も全国よりも急激である。第2種兼業農家割合も全国の値より大きく、秩父農業は、日本農業が一般的におかれているより、さらに厳しい情勢におかれているといえる。耕地面積が一戸当平均0.55haにすぎず、山地斜面の瘦地が広いため、収入は一般に低い。今後も、専業→兼業→脱農業への動きは進むものと思われる。また、他産業に比べ、老年労働者が多いことが特色である。

昭和45年現在、43%を占め、構成比において、第1次産業の減少分だけ増加しているのが、第3次産業である。建設・運輸・不動産業などの、特に昭和40年以後の増加が目立つが、これは、西武鉄道の進出によるところが大きい。

さて、次にこの市を特徴づけている製造業の内容について述べる。秩父織物業は、江戸時代に農家副業から発達した在来工業である。長い間、この地方の中心産業の1つとして歩んできたが、昭